

中国の主要大学日本語学部における日本語教科書の使用状況

鮑 顯 陽

中国語研究室

Textbooks Used by Japanese Departments in China's Leading Foreign Studies Universities

Xianyang BAO

Department of chinese, Asahi University

Summary

Textbooks are absolutely essential to any education. Foreign language textbooks in China have gone through tremendous transformations since the nation's founding in 1949; so have textbooks for Japanese majors, which have witnessed considerable improvement. Nevertheless, a host of new problems have emerged that need to be addressed.

This paper reviews the evolution of Japanese language textbooks in China, followed by a survey of textbooks and curricula for Japanese majors at some of China's prominent foreign studies universities, including the Japanese Language Department of Beijing Foreign Studies University. Based on an examination of the pros and cons of the current Japanese textbooks, the paper concludes that it is urgent to bring out better Japanese language textbooks as soon as possible.

一、初めに

ご承知のように、どんな学校教育においても、教科書は重要な役割を果たしている。もちろん外国語の教科も同じである。今、中国において新しいタイプの教科書は今までの教科書と違って、学習者中心、学習者の主体性を強調し、いろいろと改善をやっており、成果を挙げてい

るように見える。外国語の授業もそれによって講義方法の改善や指導方針の転換などを考えなければならない。ただ、この改善や転換などは試験的なもので、いい面もあるし、それによって新しい問題も出てくるのである。本論文では中国における外国語の、特に日本語の教科書の変遷や中国主要大学日本語学部の教科書の使用状況などについて調査を行い、さまざまな角度からそれを論じてみたのである。

二、教科書の変遷

1949年に中華人民共和国が成立してから、中国の学校において英語やロシア語などの外国語の教科が開設され、教科書もそれなりに普通に使われていた。その後、プロレタリア文化大革命期（1966-1976）の外国語教育においては、最初の授業でまず習うのは日本語では「毛主席万歳（もうしゅせき ばんざい）」、英語では「Long live chairman Mao」であった。それは新中国の創設者である毛沢東（1893-1976）を讃えるためであった。教科書の一番最初のページもそうであった。その後、プロ文革時代が終わり、その前に使っていた教科書が復活し、イデオロギーを離れ、日常用語の勉強が重視されるようになった。これは正常な外国語習得の状況であろう。

それから、ずっと普通に「What is this?」「What is that?」で始まった英語の勉強、同じように「これは何ですか。」「それは何ですか。」で始まった日本語の勉強も問題視され、これは「幼児教育」だと批判され、改善が求められた。その結果、今では、それがほとんど全ての教科書から消えてなくなったのである。これは当然と言えば当然の結果であろう。

発音の段階の勉強においても同じように思われる。発音の段階で昔の外国語の教科書によくあるのは、人間の口腔の断面図である。この発音はこの部分を使い、その発音はその部分を使う、また、この発音はこのように舌を巻いたままするものだというように、教師は指導しなければならない。ただ、それが普通の人には分かりにくいから、指導する側は説明に困るし、勉強する側も大多数は要領が分からない。それは本当に必要なかと思う人が多い。はたしてだんだんとそれもほとんどの教科書からなくなったのである。

また、初級の段階の場合、昔の教科書はほとんど会話の文だけであったが、今の教科書はそれと違って、普通、一課は二つの部分からなる。一つは会話の文であって、もう一つは文章である。両方を学ぶことができ合理的ではないかと思われる。

そればかりでなく、昔の会話の文にはみな改まった言い方しかなかったが、今はその会話の文もできる限り実際の日本人の会話に近いように砕けた言い方を使っている。たとえば、「—んだ。」とか、「—ちゃって—」とか、「—だっけ?」とかの言い方や助詞の省略も多く見られた。それがいかにも日本人の会話らしくなってきたように感じられる。

新しいタイプの教科書は古い教科書の文法中心、教師中心から脱却し、学習者中心、生活中

心へと変貌した。その工夫は評価してしかるべきだと思う。

三、新しい教科書の問題点

しかし、新しいタイプの教科書はすべていいというわけではない。教科書自身の問題や指導する立場にいるものとして新しいタイプの教科書を使う際、気をつけなければならない点も多々あると思う。次にそれについて詳しく述べてみたいと思う。

3. 1 話し言葉と書き言葉の問題

前にも述べたように、昔の教科書は会話の文でも改まった言い方しか習わなかったので、実際には、日本人の間では普通そういう会話はあまりしないと言われている。確かにそういう問題がある。それで、新しいタイプの教科書は会話の文において、できる限り日本人の実際の会話に近い形で編集されている。特に、大学生の年齢層でよく使われる若者用語や省略文が多用されている。それはそれでよいのであるが、ただ、教師としては外国語の初心者が文章を暗記することは重要だという共通認識を持っているから、よく本文を覚えるように指導している。しかし、学習者にはあまりにも砕けた会話の文をしっかりと覚えてしまって、どんな場合でもそのように日本語を使ってしまうという傾向が出てきたのである。ひどい場合には、センテンスを作ったり、作文を書いたりするときにも砕けた文になることがある。そして、直してもなかなか直らない。例えば、「私、大学二年生。」「彼、そう思った。」「先生、忘れちゃった。」というような言い方は普通の会話においてはよいのであるが、それを書き言葉として使ったり、改まった場合の会話として使ったりするのはどうかと思う。どのように話し言葉と書き言葉や若者の間の砕けた会話と改まった場合での会話をうまく区別して使うかについて、教育者としては繰り返し指導しなければならない。

3. 2 常体と敬体の問題

以上の3. 1とも関係があるが、どんな場合に常体を使い、またどんな場合に敬体を使うかについても問題がある。旧いタイプの教科書は「です」「ます」体をきちんと習っているから、学習者はよく把握しているが、新しいタイプの教科書で初めから長い間砕けた会話の文しか習わなかった学習者は常体を使いこなす反面、かえって敬体が苦手なようである。しかし、外国語、特に日本語の学習者にとって、話の相手による常体と敬体との素早い切り替えがどうしても必要である。日本語において敬語が非常に重要であるから、指導する立場にある教師としては常にそれに注意し、正しく指導しなければならない。

3. 3 国語教育と日本語教育の問題

一言で言うと、これは日本の学校文法と日本語教育文法の取り扱い方の問題である。中国には「語文教育」と「対外漢語教育」というのがある。それと同じように、日本においても「国語教育」と「日本語教育」という区別がある。前者はいわゆる自国民あるいは母語話者に対する国語教育で、後者は外国人に対する日本語教育である。それは本来まったく違う教育体系であると言ってもよい。それらをきちんと分けて考え、違う教育対象者に違うやり方で教えるのは普通である。ただ、日本と中国との間には少し普通でないところがある。それは両国とも漢字圏の国であるという点だ。その共通点を無視したほうがよいのか、それともそれを活かしたほうがよいのか、というのは問題の所在である。それなら、日本の国語教育の要である学校文法と日本語教育文法との間にいったいどういう違いがあるのか、筆者はその違いを次のようにまとめてみたので、それを見て見よう。

まず、品詞についての言い方である。

名詞：

学 校 文 法	普通名詞	固有名詞	代名詞	数詞	形式名詞
日本語教育文法	同 上	同 上	同 上	同上	同 上

動詞：

学 校 文 法	五段活用動詞	一段活用動詞	変格活用動詞
日本語教育文法	I 類 動 詞	II 類 動 詞	III 類 動 詞

日本語教育文法では五段活用動詞のことを「グループ1動詞」、「強変化動詞」、「子音語幹動詞」などという場合もある。

形容詞：

学 校 文 法	形 容 詞	形容動詞
日本語教育文法	イ形容詞	ナ形容詞

副詞：

学 校 文 法	情態副詞	程度副詞	陳述副詞
日本語教育文法	様態副詞	同 上	誘導副詞

助詞：

学 校 文 法	格助詞	並列助詞	提示助詞、副助詞	終助詞	接続助詞
日本語教育文法	同 上	同 上	取立助詞	同 上	接続形式

以上を見ても分かるように、名詞などほとんどの言い方は同じか似ているが、動詞と形容詞の種類やその活用形についての言い方はだいぶ違っている。なぜ国語教育のための学校文法があるのに、わざわざ日本語教育の文法体系を作ったのか、それにはわけがある。さきほど述べたように、それはいかにして外国人に日本語を教えたらよいのか、日本語教師がそれに腐心した結果だと言えよう。ただその対象となる外国人はすべての外国の人を指しているのであって、端的に言えば、主に漢字を知らない欧米人などのような外国人のことである。そういう漢字を知らない外国人に「五段活用動詞 (godankatuyoudousi)」や「上一段活用動詞 (kamiitidankatuyoudousi)」などと言っても相手は分からないから、新しい定義が必要である。形容動詞 (keiyoudousi) もその他のいろいろな「ー形」もそうである。ただ日本人にとって同じ外国人である中国人にはこの新しい定義が必要なのかという疑問がある。それは中国人が漢字を知っていて、学校文法の定義のままでもかまわないからである。たとえば、「形容動詞」は文字通り形容詞と動詞の性質を併せ持っている日本語独特の品詞で、動詞もそうである。「五段活用動詞」はア、イ、ウ、エ、オの五つの段にみな活用形があり、「上一段動詞」はウの上の段に活用形があるから、そう言われていると教えればそれが中国語になくてもみんな理解できる。「五段活用動詞」のことを例に取ると、中国人にそれを教える場合、五十音図をまず覚えさせてから、「五段活用動詞」の活用形も教えやすくなるわけだ。例えば「書く」という動詞の活用形は語尾の「く」で、それを五十音図のカ行の「か、き、く、く、け、け、こ」に変えて覚えさせればよい。「か」は未然形で、「ない」をつけて、否定を表し、また受け身(れる)や使役(せる)を表す助動詞などもつけられる。「き」は連用形で、普通、助動詞の「ます」をつけて使う。二つの「く」の一つは連体形で、名詞を修飾する。もう一つは終止形で動詞のもとの形である。二つの「け」の一つは假定形で「ば」をつけて使う。もう一つは命令形である。最後の「こ」は推量形で、「う」をつけて使う。語尾が「す」の場合は「さ、し、す、す、せ、せ、そ」、「る」の場合は「ら、り、る、る、れ、れ、ろ」と、以上のことを教えれば中国人はたいていすぐに覚えてしまうのである。したがって中国人を相手にわざわざ別の定義を教える必要はないのではないかと思われる。西洋人などを教える場合は確かに「形容動詞」の定義は難しいから、「ナ形容詞」という言い方を使った方が分かりやすいし、「五段活用動詞」や「一段活用動詞」の代わりに「Ⅰ類動詞」や「Ⅱ類動詞」の言い方も必要であろう。筆者が言いたいのは相手によって教育を施す必要があるということである。それは漢字を知らない西洋人などに漢字の筆画の練習をさせる必要があるが、中国人にはそうさせる必要がないという問題と共通している。もちろん、日本語にも独特の漢字があって、中国人は日本語を習う際、それを覚える必要があるが、両国共通の漢字などについてはその発音を覚えればよく、漢字の勉強は難点にはならない。したがって、中国人の学習者は日本語教育文法を習ってもよいし、日本人の使っている国文法=学校文法を勉強しても何の不都合もないのである。

3. 4 文法体系の問題

日本語教育文法が必要ないというのではない。対象者を見ないで盲目的にそのまま使うのはどうかというのである。日本語教育の文法体系は古い学校文法より定義が客観的でよいかもしれないが、ただ一つ問題がある。それは辞書との整合性である。ご存知のように、日本語の辞書のほとんどは学校文法の文法体系に基づいて編集されているから、日本語教育の文法体系だけを習った人にとっては辞書を引くことは難題になる。また最初から違う文法体系を習わなければならないからである。この問題を解決しない限り、面倒である。

3. 5 豊富な内容と授業時間数の制約の問題

中国の新しいタイプの教科書は学習者や練習に重点をおいていることは非常にいいことである。教育者が一方的に教え、学習者が消極的に知識を受け入れる教育方法はもう旧いと言わざるを得ない。ただ、学習者中心であるがゆえに、練習をたくさんする必要がある。それで時間が余計にかかる。そのためにいかに必要な時間を確保できるかという問題がある。

3. 6 練習帳の問題

中国のほとんど全ての教科書は付録としての練習帳とセットになっている。練習帳は教科書の補足として重要な役割を果たしている。また、外国語の習得において繰り返し練習する必要があるので、その必要性も十分に認識しなければならない。ただそれにもやはり時間の確保が時々問題となってくる。せっかく練習帳があるのに、授業時間の制約があるから、やる時間がない、あるいはじっくりやることができないという声がある。練習帳をどのように利用すればよいのか、それは教育者にとってやはり一つの課題であろう。

四、教科書使用の現状

これまで中国における日本語の旧いタイプの教科書と新しいタイプの教科書についていろいろ述べてきたが、明らかにそれはただ単なる教科書という領域の問題だけではなく、文法体系などの問題でもある。

昔、中国において、一冊の教科書が何年も、あるいは何十年も使用されていた時期があった。英語の教科書の例だと、例えば、北京外国語大学の故許国璋先生が編集された『英語』という教科書は1980年代から1990年代にかけて一時大流行していた。小学校、中学校、大学はもちろんのこと、各種の英語教室や英会話教室もそれを使っているの、「許国璋英語」が専門用語になったほどであった。その後、外国語の教科書も多様化の時代を迎え、たくさんの出版社からいろいろな教科書が出版されるようになった。日本語の教科書も同じで、それで市販されているたくさんの教科書から一番いいのを選択する必要性が出てきたのである。まずどういう教

科書があるのか、それからその日本語教育の重点はどこに置いたのかを見るのだが、最初に一番大事なのはやはり教科書について調査をし、研究することである。

北京外国語大学日本語学部も数年前からそれぞれの担当の先生たちが教科書についていろいろと調査をしていた。それから検討を重ねた結果、主な科目で使用されている教科書（2011年現在）を決めていた。それは次の通りである。

- 1、一、二年生精読の授業：『総合日本語』 1、2、3、4冊 北京大学外国語学院日本語学部編 北京大学出版社
- 2、一年生会話の授業：『みんなの日本語』 1、2冊 外語教学与研究出版社
- 3、一年生ヒヤリングの授業：『初級日本語ヒヤリング』 大連理工大学出版社
- 4、二年生会話の授業：『日本語会話』 外語教学与研究出版社
- 5、二年生ヒヤリングの授業：『横山先生の日本語5』 日本語教育センター
- 6、二年生速読の授業：『日本語中級読本』 上海外語教育出版社
- 7、三年生文学選読の授業：『上級日本語』 上海外語教育出版社
- 8、三年生精読の授業：『中級日本語読解』 大連理工大学出版社
- 9、三年生会話の授業：『新大学日本語ヒヤリングと会話』 高等教育出版社
- 10、三年生ヒヤリングの授業：『毎日のヒヤリング』 日本凡人社
- 11、四年生精読の授業：『上級日本語』 南開大学出版社
- 12、三、四年生作文の授業：『日本語の作文』 高等教育出版社
- 13、三、四年生通訳の授業：『日本語通訳3級』 外文出版社
- 14、三、四年生翻訳の授業：『現代日中翻訳』 高等教育出版社
- 15、四年生同時通訳の授業：『日本語通訳2級』 外文出版社
- 16、四年生論文指導の授業：『論文の書き方』 日本くろしお出版

以上は現在北京外国語大学日本語学部で使用されている教科書だが、いろいろな出版社の教科書を使用していることが分かる。筆者はその他の中国の主要な外国語大学日本語学部の状況も知っておく必要があると思う。従って、筆者は中国の主要な七つの外国語大学の日本語学部を中心に調査を試みた。それから、授業時間は教科書の使用と密接な関係を持っていると考えられるから、参考にそれもついでに調査をした。それは次の通りである。

- 1、A大学：日本語の基礎的な授業は一年生と二年生で、一年生は週8時間、二年生は週6時間。北京大学編『総合日本語』（全四冊）の1、2、3、4冊を使用している。一年生はその第1、2冊目を、二年生はその第3、4冊目を勉強している。
- 2、B大学：日本語の基礎的な授業は一年生、二年生、三年生にわたり、一年生は週10時間、一年間300時間。二年生は週8時間、一年間240時間。三年生は週6時間、一年間180時間。一、二年生は北京第二外国語学院編『基礎日本語教程』（全四冊）を使用し、一年生はその

第1、2冊目を、二年生はその第3、4冊目を勉強している。三年生は『日本語』という未出版の教科書を使用している。三年間の授業時間数は720時間という計算になる。

3、C大学：四年間とも基礎的な日本語の授業がある。B大学と同じように一年生は週10時間、二年生は週8時間（文法と練習は別々に教える）、三、四年生の授業時間は不定。使用している教科書は上海外国語大学編『新編日本語』（全八冊）で、一年生はその第1、2冊目を、二年生は第3、4冊目を、三年生は第5、6冊目を、四年生は第7、8冊目を勉強している。一、二年生の授業時間数は540時間で、今後は北京大学編『総合日本語』を使う予定。

4、D大学：一年生は週10時間、二年生は週8時間、三年生は週4時間、四年生も週4時間。上海外国語大学編『新編日本語』を使用し、全部で8冊あるので、一年二冊ずつ習う。四年間の授業時間数は780時間になる。

5、E大学：一年生は週10時間、二年生は週8時間。北京大学編『総合日本語』を使用している。一年生はその第1、2冊目を、二年生はその第3、4冊目を勉強している、授業時間数は二年間で540時間という計算になる。

6、F大学：E大学と全く同じである。一年生は週10時間、二年生は週8時間。北京大学編『総合日本語』を使用している。一年生はその第1、2冊目を、二年生はその第3、4冊目を勉強している。授業時間数は二年で540時間という計算になる。

7、G大学：同上。

以上、中国における主要な七つの外国語大学日本語学部の教科書の使用状況を述べてきたが、それを詳しく分析すると、次のような幾つかの問題が参考になるし、また今後の研究課題にもなると思われる。

(一)授業時間数の確保。まずほとんどの学校は十分な勉強時間を確保しているということだ。四つの大学の授業時間数は大体二年間で540時間、一つの大学は三年で720時間、もう一つの大学は四年で780時間である。A大学だけは二年間で420時間である。『日本語中級 J501』（日本スリーエーネットワーク）という教科書によると、日本語の中級レベルに達するには、400－600時間の学習時間が必要になるという。中級レベル以上の水準だと、700－800時間が必要だという計算になる。初級の段階においてはじっくり勉強をし、しっかりとした日本語の基礎を固める必要がある。そうしなければ、次の段階の勉強、例えば、翻訳や通訳などの勉強に影響を与えるかも知れない。基礎的なものについて具体的に言うと、それは外国語を聞く、話す、読む、書く、それから訳すことである。

(二)日本語学科専用の教科書の使用。中国の教科書は、専門教育用の教科書と一般教育用の教科書に分かれている。日本語の教科書では、例えば『大学日本語』という教科書だと、その『大学』という文字の意味は第二外国語科目用か独学用の教科書だということになる。以上調査した七つの大学のうち、五つの大学は北京大学外国語学院日本語学部編・北京大学出版社が

2004年に出版した『総合日本語』という教科書を使用している。残りの二つの大学は北京第二外国語学院編の『基礎日本語』と上海外国語大学編の『新編日本語』という教科書を使用している。以上の教科書はみな日本語学科専用の教科書である。ちなみに北京大学外国語学院日本語学部編の『総合日本語』が使用しているのは日本語教育の文法体系で、北京第二外国語学院編の『基礎日本語』と上海外国語大学編の『新編日本語』は学校文法の文法体系を使用している。

それから、初級日本語の習得年限は二年間が適当であり、授業時間数について一年目は週10時間、二年目は週8時間が妥当といえるであろう。

(三)新しい教科書の編集。どの大学も使える新しい教科書が必要であり、それが急務であるというのはもう中国における各外国語大学の共通認識である。したがって、中国において2009年から北京外国語大学の日本学研究センターを中心に、日本の国際交流基金会の後援で、新しい日本語の教科書の編集を始めた。それは『基礎日本語総合教程』とあって、中国の高等教育出版社から出版されている。全部で四冊である。第一冊目は北京師範大学日本語学部、第二冊目は北京第二外国語学院日本語学部、第三冊目は北京外国語大学日本語学部、第四冊目は北京大学外国語学院日本語学部がそれぞれ担当し、2012年に四冊すべてが出版される予定である。それはただの教科書だけではなく、教師の指導用参考書もあり、また先ほど述べたような練習帳も同時に出版される。それが将来中国における日本語教科書のモデル本になるであろうと考えられる。

五、終わりに

前にも述べたように、学校教育において、教科書は非常に重要である。いい教科書があれば、教える側は教えやすいし、学ぶ側もたくさん勉強ができる。ただ教科書は編集に時間がかかるし、出版されてから数年たつと、内容が旧くなると言われる。いい教科書だと、何回も版を重ねることができるが、普通の教科書はそうは行かない。したがって、中国において教師は教科書作りを敬遠する傾向がある。また中国において、教科書は専門書より相対的に評価が低い。これは短絡的な考え方に基づいたもので、改めなければならない。教師としていい教科書を作ることが自分に課せられた使命だと考えるべきであり、学生のためにも、自分のためにもこの使命を果たすべきであろう。

参考文献

- 1) 張慧芬, 日本語における教学と教材改革の研究, 『北京外国語大学2009年教学研究論文集』, 北京外語教学与研究出版社, p.41-47 (2010)。
- 2) 段帆, 日本語の精読の授業に関する実態調査, 『日本学研究論叢第五集』, 北京外語教学与研究出版社, p.263-272 (2008)。
- 3) 土岐哲等編, 『中国語版日本語中級 J501』, 日本スリーエーネットワーク, (2001)。
- 4) 彭広陸総主編, 『総合日本語』, 北京大学出版社, (2004)。
- 5) 曹大峰総主編, 潘寿君主編, 『基礎日本語総合教程, 第二冊, 教学参考書』, 北京高等教育出版社, p.228-230 (2010)。
- 6) 沈茅一主編, 『日本語』, 北京高等教育出版社, (1997)。